

「マスク」と「アイデンティティー」 —— 英語学習における自己の形成と向上 ——

"Masks" and "Identity":

Self-construction and Self-improvement in English Language Learning

ドライデンいづみ *Izumi Dryden, Ph.D.*

(人間発達学部教養部会)

はじめに

「洋画はあまり見ない」という学生は多い。そういった状況下においては「英語は苦手」という学生がほとんどである。しかし、もし洋画を鑑賞する機会があるならば、そして英語が理解できるような機会があるならば、こういった学生の意識は変わるのではないだろうか。学生はその映画が「面白いかどうかわからないから見ない」と言う。ということは、見てみるともしかしたらその映画は面白いかも知れないのである。大学には映画を鑑賞するために最適な環境設備が整っており、英語学習にそれらの機器を利用しないのは勿体無い。そこで、学生に英語を学習すると同時に自分自身についても考えさせる授業内容として、「マスクとアイデンティティー」というテーマの下に映画を使用した授業を試みた。

学生に「マスク」という言葉を聞くと、どの映画作品が思い浮かぶかという質問をした結果、主な作品として『オペラ座の怪人』^{注1}、『マスク』^{注2}、『スパイダーマン』^{注3}等が挙げられた。最近の作品として「マスク」で知られているわけではないが、「マスク」にも関連するティム・バートン監督の『アリス・イン・ワンダーランド』^{注4}はアイデンティティーに関する内容ということもあり鑑賞したいと希望する学生が多かった。『オペラ座の怪人』は、本年度(2011年1月末まで)名古屋で劇団四季が公演を行っているため学生の間では知名度が高い。しかし、公演は日本語で行われるため、英語版は鑑賞したことがないという学生が多かった。『マスク』は、俳優ジム・キャリーが緑色のマスクを被り、ドタバタ騒動を繰り広げて行く中、映画の中の音楽や踊りが楽しい。学生はそのために映画の内容が印象深く残っているようである。『スパイダーマン』は、名前や赤と青の独特のコスチュームが知られている一方で、見た事がないという学生がほとんどで、内容は全く知らないということであった。特に、女子学生はその内容は男子向けだと思いついていて、アクション映画の一種としか考えていない様子であった。

『スパイダーマン』は、主人公ピーター・パーカーが高校生ということもあって、10代の学生とも共通する点が多い。何故、ピーターは「スパイダーマン」と呼ばれヒーローとして活躍することとなったのか。何故、「スパイダーマン」という名前になったのか。学生は最初の時間にスパイダーマンの生い立ちを知ることで、「『スパイダーマン』がこのような物語とは知らなかった」と言って興味を覚えるようになった。

『スパイダーマン』シリーズには、心に残る多くのフレーズが登場する。学生は印象深いフレーズを聞き取ってプリントにコメントを書く。映画のタイトルで有名な「スパイダーマン」の名前ではあるが、実際には最初はピーターが付けたくて付けたわけではなかったのである。この名前になるまでには、ピーターの人生においても様々な事情があったのだ。『スパイダーマン』以外の作品においても、学生は映画の主人公の人生や人格を客観的に観察することによって、自分自身の日常と比較している。映画の登場人物にはそれぞれ意味や特徴をともなった名前が付けられているということは意外と知られていない。学生は、名前の意味がわかるとさらに映画の内容に関して興味を持つようである。名前はそれほど物語において重要な役割を担っているのである。

1. 「名前」

「名前」は、我々がこの世に生を受けてこの世を旅立つまで我々とともにある。時には「名前」だけが墓石に刻まれて永遠にこの世に残ることとなる。「名前」は、我々がこの世に生を受けた時に自分自身で決めたわけではない。しかし、「名前」を手に入れた瞬間にこれからの人生における責任が始まる。というのも、通常新聞に掲載されるのは「名前」である。良い事をすれば世間にその「名前」を認知してもらうことになるが、逆に悪い事で「名前」が掲載されると家族まで肩身の狭い思いをするはめになる。それゆえに自分自身の行動にはいつも「名前」とともに責任がともなう。「名前」というのは、いわば「マスク」(仮面)のようなものである。その「名前」を持つ事で自分の行動に責任を感じ、行き過ぎた行動を抑制することもある。また、有名になると「名前」を汚すことのないよう注意して行動するからである。つまり、こういった状況においては「名前=自分」である。

自分が他の「名前」を持っていたとしたら、現在の自分とは異なった自分になっていたであろうか。もし自分に「名前」がなかったならばどういう状況にいたのであろうか。『スパイダーマン』の主人公ピーターは、「スパイダーマン」という別名を持つことになった。「スパイダーマン」は活躍し、どんどん有名になり、新聞には毎日「スパイダーマン」の名前が掲載される。しかし、ピーターが「スパイダーマン」であるという事実を知る者は最初はいない。ピーターという一人の人間であると同時に「スパイダーマン」という「マスク」を被った別人になることで、ピーターは外見の変化とともに内面的にも変化していく。ピーターの周りの人間はピーターの変化に驚きを隠せないが、ピーターには自分は「スパイダーマン」として街の平和に貢献するべきであるという思いが、ある事件をきっかけに膨らんでいったのである。それは、自分を本当の息子のようにかわいがってくれた叔父ベンの死であった。叔父の死をきっかけに、ピーターが「スパイダーマン」のマスクを被る機会は増加していく。同時に、通常のピーターとして人間的にも成長を遂げ、自らのアイデンティティーを確立していくのである。

別名を持って自らのアイデンティティーを確立していく物語は、最新の映画版『アリス・

『イン・ワンダーランド』のアリスの置かれた状況からも理解できる。現実のアリスは自分が一体何をしたいのかわからない。頭が混乱したアリスは穴に落ち、「不思議の世界」を体験する。その「不思議の世界」は、実は自分の無意識の世界、すなわち自分自身が造り出した世界であるということが最初理解できない。「不思議の世界」の住人たちには戻ってきたことを喜ばれるが、アリス自身は自分は皆が期待する「アリス」ではないと否定する。赤の女王に「アム」と名付けられたアリスは、自分自身のアイデンティティーを確立するために様々な試練を乗り越えなければならない。

『スパイダーマン』にしても、『アリス』にしても、物語の中で「フー・アイ・アム」(who I am、「私は誰か」というフレーズが繰り返し登場する。主人公たちは、様々な試練の中で「フー・アー・ユー」(who are you?、「お前は誰だ、お前は何者だ」と訊ねられる。最初は明確に答えられない主人公たちであるが、困難を乗り越えて自信をつけるにつれて、「自分は何者か」、あるいは「自分はどのような人物になるべきか」ということがわかってくる。そして、その困難を乗り越えたという自信こそ、主人公たちを強くし、未来への希望を抱かせる糧となるのである。物語の登場人物の名前は通常意図的に付けられており、適当に付けられたわけではない。名前の由来や背景が理解できると違った視点から映画を鑑賞することができる。登場人物は、たいていその名前の意味を示唆する人物として物語の中では描写されている。時にはその名前と性格こそが物語を理解する上で重要な鍵となっている。

英語名の「ピーター」は新約聖書の使徒ペテロのことである^{注5}。ペテロは、キリストの最初の弟子であり、使徒達のリーダーである。キリストから「天の国の鍵」をまかされたとされる。ピーターはそういったペテロの特徴を受け継いでいると考えられる。『スパイダーマン』では、聖書的な言葉やフレーズが多く登場する。例えば、ピーターの叔父が自宅の電灯を交換する時に「光よあれ」(Let there be light)と言ったりする。これは旧約聖書の創世記1章3節の言葉である。叔父は死後、ピーターの中で神的な存在として生きることになるが、叔父がこの聖書の一節を言ったことには重要な意味が隠されている。ピーターの心には常に「光」が必要であるからだ。

2. 「性格」

ピーターの性格は「スパイダーマン」でありながら、必ずしも完璧ではない。ピーターは学校ではいわゆるまじめな「よい子」である一方、「スパイダーマン」としてはやされるようになると自惚れたりもする。その状況は、「ヒーロー」にも人間的弱点があるということを示唆している。そのため、その「自惚れ」を戒めるかのように映画『スパイダーマン3』では、ピーターの心の闇を象徴するかのように宇宙からの得体の知れない未確認生物がピーターの身体に寄生し、同時にピーターの心も蝕んでいくことになる。赤と青のコスチュームで人気者となったピーターは、その心の闇を象徴するかのように黒のス

パイダーマンと化してしまうのである。

黒のスパイダーマンになる前兆は、すでに『スパイダーマン』の最初の物語においてピーターの叔父に対する反抗的な態度の中に見て取れる。叔父が亡くなる前にピーターは叔父に対してひどい言葉を吐いてしまう。そして、叔父はその後にピーターと話をする間もなく車強盗に銃で撃たれて死んでしまうのである。この時のピーターは一種の反抗期の青年であるが、ピーターはこの経験を後々まで悔やむこととなる。林道義は、『ユング』の中で、「我々は誰もが多かれ少なかれ経験しているように、思春期のある時期に父親なり母親が急にうとましくなり、その一挙手一投足がいやらしいとか汚らしいと感じたり、うるさい存在だと思えてならない時期を体験する。しかし、しばらくたつと、まるでウソのように、また父や母に愛着を感じ、そんなに悪い人ではなかったんだと安心したりする。これは人が親から心理的に独立しやすいための自然の摂理であり、本能の妙であり、この感情によって子供が親から離れていきやすくなっているのである」と説明している^{注6}。

ピーターは、叔父の死後、叔父を自分の父親として心の中に生かそうとする。しかし、叔父を殺害した犯人に対する憎悪の気持ちがピーターの心に闇を創造してもいる。人間は誰しも心の中に「闇」の部分を持ち合わせている。それは必ずしも悪いことではなく、その部分を持つ事で人間としてのバランスを保っている。しかし、その部分が他人を不幸にしたり、他人の生死に関わってくると問題となってしまう。人間には基本的に自らの「闇」の部分で補おうとする力が備わっている。その力はある瞬間に突然威力を発揮したりもする。その瞬間とは、他人からある言葉を聞いて感銘を受けた時や他人からの愛情に気付いた時など、そういった機会ははかり知れない。すなわち、「自分」というものは「他人」の力によって成り立っているのだと気付く瞬間、「生」あることに感謝したくなる。「他人」が活着しているからこそ、「自分」も活着しているのである。そのように考えると、「他人」も「自分」と同様に重要な存在となってくる。そして、「他人」のために生きたいと思う瞬間に、人間は自らは気付くことのなかった自分の力を超越した「力」を持つこととなる。

『アリス』のアリスも「不思議の世界」の住人たちのために赤の女王と戦おうと決心する。この決心の瞬間に、アリスはもはや器の小さいアリスではなく、自分で自分のことを決定するアリス、すなわち「本当のアリス」となる。そのアリスの成長過程は、アリスの衣装の色の変化や「剣」という戦いの道具に暗示されている。アリスが精神的成長を遂げると同時に、アリスに「お前は誰だ」と問いかけたキャタピラーである蝶の幼虫アブソレムは蝶へと変化し、「本当のアリス」の完成を示唆している。つまり、キャタピラーの蝶への変化は古いアリスからの脱皮を暗示し、アリスの再生をも意味しているのである。自分の意志を持ったアリスの誕生である。

3. 「力」

ピーターの叔父はピーターに偉大なる言葉を残す。それは、ピーターの人生の糧となり、

「スパイダーマン」として世の中の悪と戦うための「力」となる。叔父の言葉である「大いなる力は大いなる責任をともなう」(With great power comes great responsibility)は、スパイダーマン・シリーズの全体的なテーマとなっており、何回も神の言葉のように物語の中に登場する。ピーターは、「スパイダーマン」として強くなっていく一方で、その人間以上の「力」を持つことの責任を重く感じるようになっていく。そのため、「力」は増していくものの、それに比例してピーターの人間としての葛藤も増していくこととなる。ピーターは、ピーターとして物事を判断するだけでなく、「スパイダーマン」として生きなければならない宿命を背負うのである。ここには、誰にも言えない秘密を抱えたヒーローの孤独がある。しかし、その孤独を克服するのにもまた「力」の役割なのである。

『アリス』のアリスは、赤の女王と白の女王の狭間で葛藤する。アリスに必要なことは、自分自身を恐れないことであり、それを克服する時アリスには何事も恐れない「力」が備わることとなる。物語の中で、アリスは二つの世界を生きている。一つは現実であり、もう一つは自分の記憶の世界である。林道義は『ユング』の中で心について次のように説明している。

心の中に全くちがう二つの傾向が存在していることは、病的でもなんでもなくて、じつは誰の中にもあるものである。人間は生まれたときはこの普遍的無意識だけをもっているのである。そして成長するにつれて、ちょうど大海の中の小島のように自我が生まれてくる。そのため、敏感な人はこの二つのものの対立に気づき、ときに悩まされることになる。普通は、とくに大人たちは、現実世界で生きていくために、何だかわけのわからない夢のような世界を否定し、しっかりと利害を見定めた醒めた意識をもって生きていかねばならない。現実の世界で生きていくためには、No.2の人格は邪魔であり、敵でさえある。だからたいていの人は、このNo.2に気づいても、急いで否定し、押し殺してしまうのである。(p.56)^{注7}

赤の女王と白の女王の戦いは、実際にはアリスの内面で起こっていることであり、敵である赤の女王はアリスの自己否定の精神が体現したものであると考えられる。白の女王は、本来アリスが自分の内面で欲していたことの象徴であり、アリスは自分の意志を強く持つことで白の女王を勝利に導く。白の女王の勝利は、アリス自身の勝利でもあるのだ。アリスは、この体験によって自分自身の中で英雄像を形成していく。その結果、現実において自分の意志によって婚約を拒否し、自分の生きる道は自分の意志で決定する。そして、ビジネスの世界でも海外へと羽ばたいていくことになるのである。人間の「力」は、無限の可能性を秘めているということがアリスを通じて理解できる。アリスは自分を受け入れることで、自己を確立したのである。

おわりに

映画の主人公や登場人物は、実際に学生と同じような環境にあったり、心境の変化を分

かち合うことで学生の共感を得ている。特に、『スパイダーマン』のピーターは高校生から大学生になる過程を経たり、『アリス』のアリスは19歳ということもあり学生の年齢と近い。そのため、学生は物語の中で主人公たちが悩んだり葛藤する状況を自分の状況と比較して考えたり、それを乗り越えようとする主人公たちを応援したりする。大人数の授業においては、全員が同時進行で英語を学習することは困難であるが、映画鑑賞によって全員が平等に学習する機会を与えられることでその問題は解決される。映画を鑑賞している間は学生はおしゃべりもせず静かである。

実際に映画鑑賞によって俳優の生の英語を聴き、英単語を聞き取り、印象深いフレーズを書き留めたりする作業によって、学生自身も登場人物たちの「力」を自分のものになっているようである。また、物語にどっぷりと浸ることで主人公たちから勇気、強い意志、自信を与えられている様子は、学生の提出プリントからも理解できる。英語をただ学習するだけではなく、学生が映画の中の英語によって自分の人生について考え、希望と自信を持って未来へと歩んでいくことができるならば、映画の中の言葉は画面の中だけに留まらず、現実で活かされることとなる。学生には良い言葉を見極める能力が備わっている。その能力は使わなければ勿体ない。映画の中の主人公たちは、学生にその能力が常に学生自身の内に秘められていることを暗黙のうちに伝達している。英語学習は、学生の能力を引き出し、学生の本来の力を活かす学習方法でなければならない。そのためには、時には物語の中に生きる人間たちの「力」をも拝借しなければならないのである。

『アリス』のアリスが別の世界、すなわち自分の心の世界へと旅する物語に類似した作品として、ミヒヤエル・エンデ作の『はてしない物語』^{注8}がある。主人公バスチアンはある本を開いた瞬間に「不思議の世界」へと旅することになる。バスチアンが「不思議の世界」、すなわちファンタージェンで最終的に手に入れたものは「生命の水」であった。「はてしない物語」の中を旅したバスチアンであるが、現実には一日のことでしかなかった。しかし、「生命の水」はバスチアンの父親を精神的に生かすこととなる。なぜならば、バスチアンは「これまで見たこともないものを」見ることになるからである。

「父さんの目に涙が宿っていたのだ」(p.580)。そして、バスチアンは思う、「やっぱり父さんに生命の水を持ってくることができたんだ」(p.581)。バスチアンの父親は「今までとは全然違う声で」バスチアンに言う、「さあ、これからは、何もかも変わるぞ」(p.581)。また息子が強くなったことを実感して、バスチアンに「変わったなあ」(p.582)とも言う。「変わる」ということは簡単なようで実際には難しい。実際には、人間は外見も変われば、考え方も年をとるにつれて変わっていく。外見の変化は自然の摂理でどうすることもできないが、考え方を変えるかどうかは自らの意志次第である。それは、ほんの少しのきっかけがあれば可能である。

人生、時にはすべてが良い方向へと変わらない場合もある。しかし、自分を必要としてくれる人物は必ず存在するはずである——もし自分が他人を必要とするならば。誰もが他

人を必要とするならば、自らの中の「生命の水」は湧き出て活かされる。誰でも「生命の水」を持っている。ただそれを他人のために使うかどうかは自分次第なのである。他人のために使わなければ、ただ干涸びてしまうだけであろう。「生命の水」は様々な形で我々の中で使われる時を待っている。「生命の水」は「愛すること」であり、「他人を思うこと」であるからだ。そして、人それぞれに相応しい形が与えられている。「生命の水」はそれぞれの人間の特徴を見極め、形を変え人びとを救う。『スパイダーマン』のピーターの場合は、「スパイダーマン」という「マスク」になって。『アリス』のアリスの場合は、「自分が誰であるのか」という「記憶」となっている。

『はてしない物語』のバスチアンは、ファンタージェンを旅して最終的に「わかった。世の中には喜びの形は何千何万とあるけれども、それはみな、結局のところたった一つ、愛することができるという喜びなのだ。愛することと喜び、この二つは一つ、同じものなのだ。あとになって、バスチアンがまた自分の世界にもどってからずっと時がたち、やがて年老いてからも、この喜びはもう消え去ってしまうことはなかった。生涯のうちの最も困難な時期にさえ、かれにはこの心の喜びがあり、それがかれをほほえませ、まわりの人びとを慰めた」(p.572)。バスチアンは言う、「おいでよ！きみもおいでよ！きて、飲んでごらん！すばらしいよ！」(p.572)。

注および引用・参考文献

1. 映画『オペラ座の怪人』に関しては、[[http://ja.wikipedia.org/wiki/ オペラ座の怪人](http://ja.wikipedia.org/wiki/オペラ座の怪人)] を参考.
2. 映画『マスク』に関しては、[[http://ja.wikipedia.org/wiki/ マスク_\(1994年の映画\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/マスク_(1994年の映画))] を参考.
3. 映画『スパイダーマン』シリーズ (1-3) に関しては、[[http://ja.wikipedia.org/wiki/ スパイダーマン_\(映画\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/スパイダーマン_(映画))] を参考.
4. 映画『アリス・イン・ワンダーランド』に関しては、[[http://ja.wikipedia.org/wiki/ アリス・イン・ワンダーランド_\(映画\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/アリス・イン・ワンダーランド_(映画))] を参考.
5. 使徒ペテロに関しては、[[http://ja.wikipedia.org/wiki/ ペテロ](http://ja.wikipedia.org/wiki/ペテロ)] を参考.
6. 引用文献：林道義、『ユング』、p.19-20、清水書院、東京、1999.
7. 引用文献：Ibid. p.56.
8. 参考文献：ミヒャエル・エンデ、『はてしない物語』、岩波書店、東京、1985.